

# 鎌倉と結核—鎌倉海浜院と長與專齋

結核予防会顧問

結核予防会アーカイブ委員 石川 信克

鎌倉の駅から江ノ電で5分、長谷駅で降りて5分北に歩けば、大仏の鎮座する高德院に着く。入れば、見事な大仏さまの穏やかな座像が現れる（写真1）。

鎌倉といえば、大仏（国宝）と鶴岡八幡宮が有名である。鎌倉幕府にまつわる史跡、風光明媚で富裕層の別荘地ではあったが、現在のように、観光の街として栄えてきたのは、明治以降らしい。しかし結核との関係は余り知られていない。結核治療の近代的薬物療法が無かった時代、西欧諸国でも、自然環境が良いサナトリウム（療養所）での大気・安静・栄養療法が行なわれていた。

明治初期に東京医学校（東京大学医学部の前身）に招聘され、教鞭をとっていたドイツ人医師エルウィン・ベルツ博士は、当時の先進的治療法としてサナトリウムを日本でも作るように推奨し、湘南地方がそれに向いていることを示唆したという。その影響で、湘南の海岸地域には、いくつもの療養所が建設されていった（本誌337号）。明治20年（1887）、日本初のサナトリウム「鎌倉海浜院」が、鎌倉の由比ガ浜の松林の中に開設されたが、その推進人物の一人が長與專齋（以下長与專齋・写真2）であった。

## 長与專齋（1838～1902年）について

長与專齋は、幕末から明治にかけて、日本の衛生行政の基礎を作った貢献者である。天保9年（1838）、大村藩（現在の長崎県大村市）の漢方医の子として生まれ、藩校で学んだ後、大坂にて緒方洪庵の適塾にて蘭学を学び、やがて大村藩の侍医となった逸材であった。文久元年（1861）、長崎でオランダ人医師ボンベより西洋医学を学び、明治元年（1868年）、長崎精得館の医師頭取（病院長）に就任、同年、同館は長崎府医学校（現長崎大学医学部）となり、学頭に任命された。明治4年（1871）に岩倉具視使節団の一員として欧米に渡り、ヨーロッパで医療制度や医学の実情調査を行った。明治6年（1873）帰国後に医者免許制度や医学教育などの「医制」の制定作業を行い、明治7年（1874）、文部省医務局長に就任、東京医学校の校長を兼務した。明治8年（1875年）、内務省衛生局初代局長に就任する。コレラなど伝染病の流行に対して上下水道など衛生工事を推進、衛生思想の普及に尽力した。「衛生」という言葉は、長与がHygieneの訳語として用いた。



写真1. 鎌倉大仏



写真2. 長与專齋

### 長與先生顕彰の碑

大仏に向かって左側の木立の中に「松香長與先生紀功之碑」という石碑がある(写真3)。大正8年(1919)、町制25周年の記念事業の一つとして、日本衛生行政や鎌倉の発展に貢献した長与専齋(号は松香)の功績を長く伝えるために建てられた。文章は漢文のため、鎌倉国宝館の浪川幹夫氏の助力(和文体)をもとに、解釈も交えて要旨を書いてみたい。

「鎌倉は三方山に囲まれ、南は青海原に接し、黒潮が近くに流れ、風も吹き、冬は温暖、夏は涼しく、養



写真3. 松香長與先生紀功之碑  
碑の左は筆者

生に適している。天下取りや高僧の遺跡が身近にある。山、樹木、石の一つ一つが800年前の歴史を物語っている。近年は、多くの高官や富豪が邸宅や別荘を構え、外国からの観光者も訪問、街は繁栄してきた。その基を作ったのは、実に松香長与先生である。先生は、旧肥前大村藩の医師で、明治維新後、文部・内務両省に長く歴任し、衛生局長を勤められた。医療制度の改革、衛生法規の制定等、先生の偉業は甚だ多い。貴族院議員、宮中顧問官も務められた。晩年は病者の療養のために、鎌倉の地を選び、由比ガ浜において初めて、西欧に倣った養生院の海浜院を建てた。これで世間はますます海辺の気候の有用性を知ることになった。こうして人々を助け、鎌倉の地で遂行された業績により、今日の栄えた町の住民は、町政施行満25年を記念し、長谷の大仏の傍らに碑を建立することになった。私は、先生の教えの恩義を覚え、その功績をたたえて、後世に伝えるべく碑に文章を書き記す。風光の明媚や史籍の豊かさはあっても、衛生施設は不十分であった地に、先生は、道路や上下水道を整備された。お陰で、町は天下の名勝としての価値を高めた。(後略)」題字は松方正義侯爵、文章は土肥慶蔵東京帝国大学教授による。



写真4. 由比ガ浜

### 鎌倉海浜院・海浜ホテルの碑

高德院を出て、緩やかな坂道を15分ほど南に下ってゆくと、見事な海岸線が広がって見え、由比ガ浜に着く(写真4)。一带は、海浜公園の一部で、広い海水浴場で、サーフィンを楽しむ若者でにぎわう。海岸にそってしばらく東に歩くと、空き地の一角に、江ノ電の古い車両タンコロが置いてあり、その脇に黒い石碑が見える。「ここに鎌倉海濱院、鎌倉海濱ホテルありき」と刻まれている(写真5・6)。海水浴、保養に適しているとされたここ由比ガ浜の松林の中に日本初のサナトリウム鎌倉海濱院が開院された。その後、鎌倉海濱ホテルとして生まれ変わり、内外から数多くの著名人が集い、保養地鎌倉の重要な場所となった。結核菌発見者のロベルト・コッホ博士も明治41年(1908)に訪日した際、このホテルに滞在したという。昭和21年失火により焼失した。

### 鎌倉にあった結核療養所

湘南地域にあったサナトリウムについては、前述の

本誌337号に述べられているが、12か所のうち、6か所は鎌倉にあり、その多くは現在も病院や医療施設として地域に貢献している。

鎌倉は、結核という病気と共に発展してきたとも言える。

付言：今回の鎌倉訪問と本稿のきっかけには、一枚の水彩画がある。知人の画商から、絵の裏に英語で書かれた商品があり、その内容を尋ねられた。松林の描かれたその絵は、ある外国の画家が、友人に贈ったらしく、絵の裏には、Kaihinin Hotel, Kamakura, 1911とあった。調べてみて、海浜院ホテルの名前を初めて知り、その前身が結核療養所の鎌倉海浜院であることも知った。海浜院の松林が、明治の昔と100年を越えた今とを結びつけることになった。🍵

i 湘南地方サナトリウム旧跡訪問(島尾忠男他、複十字337号2011)  
<https://www.jatahq.org/pdf/headquarters/document/tb-archive/337.pdf>  
 \*日本のサナトリウムの歴史については、高三啓輔著「結核の百年 サナトリウム残影」日本評論社に詳しい。



写真5. 江ノ電タンコロと海浜院・海浜ホテルの碑



写真6. 海浜院・海浜ホテルの碑(拡大)